

向上でできる貴重な時間

今年から始動した大本愛善学苑。職員として普段から学苑生の様子を
 知るお二人に、成長ぶりや変化、学苑の魅力をお話しいただいた。

—— 待望の学苑生を迎え、早くも半年余りが過ぎましたね。

堀 入苑式を終えホッとしたのもつかの間、苑生活がスタートし、ここでの生活に慣れるまで、学苑生にいろいろなことを教えるための慌ただしい日々だったので、あつという間に過ぎていった感じです。

時松 オリエンテーションということで、朝拝から始まって、決まり事の確認や掃除の仕方など、一カ月ほど私たちも生活を共にするような形で指導に当たってきました。

その中で、最初はお互いによそよそしかった学苑生たちも、徐々に打ち解けていったように思います。

堀 世代の違いもあるので、多少、気を使い合っていたところもあったかもしれないが、女子部は比較的早くに親しくなっていましたね。

—— 入苑当初、緊張した面持ちが印象的

でしたが、食堂でそろって三首のお歌を唱えるなど、明るく爽やかな姿も新鮮でした。現在の学苑生の様子はいかがですか？

時松 五月のみるく大祭前のご奉仕や神苑作業など、最初はどのように動いたら良いのか分からず、ぎくしゃくしているところがありました。私たちが間に入って指示を出したり、アドバイスしたりしているうちに、今はずいぶん動きに自主性が出てきたように思います。

堀 インターンとして奉仕者の皆さんと作業を共にできる時間は、とてもありがたい機会になっています。周りの状況を判断し、今、自分がどのような行動を取ればよいかなど、その場で学ばせていただいています。

あと、うれしかったのが、夏休みに帰省

した折、授業で習った盆略点前で家族にお茶をたてたとか、家の月次祭で祭員を務めたという報告を聞いたことです。

時松 ここで習ったことを一つでもいいから家で実践してみたいという、休暇前の学苑長の言葉を受けて、それぞれが家族にその成果を披露してくれたのは喜ばしいことでした。

—— 内面的な部分について、何か変化は感じられますか？

時松 みんな明るくなりました。聖地の雰囲気になじんできたこともあって、あいさつなどもすがすがしくなってきたように思います。

堀 それぞれ、表情がとても良くなりましたね。

時松 苑生同士の認識も、「他人同士」というものから一つの共同体というか、同朋というか、そういった仲間意識が変わってきた感じがします。

堀 時に人間関係は難しくもあり、いろいろな戸惑いもあるかもしれませんが、それを取り越えたとき、人として大きな成長が待っていますから、今、この仲間としかできない経験を大切にしてほしいと思います。

—— 日頃、学苑生と触れる中で、逆に気付かされることや教わることはありますか？

時松 やはり、初心に帰ることの大切さでしょうか。今年の大本歌祭では女子部三人が舞姫を務めさせていただきましたが、昼も夜も、毎日のように授業の合間を縫って稽古を重ねていました。大役に臨むに当た

り、緊張や不安、大きなプレッシャーがあったでしょうが、本番は稽古の成果が大いに発揮された舞台だったと思います。そうした姿から、祭典や行事などに対して、慣れが出てしまっている自分を反省しました。

堀 時松さん、本番のときは誰よりも緊張していましたもんね。呼吸が荒くなるほど（笑）。

時松 頑張ってきた姿を見てきたのでなおさらですね（笑）。おかげで、自分自身の在り方を見直すきっかけとなり、ありがたいことでした。

堀 私は、素直さを見習いたいですね。授業などでいろんな方のお話を聞いても、それがスッと入って行って、とにかく吸収力が違うんです。若さゆえの純真さ、素直さは素晴らしいですし、若いっていいな！と思います（笑）。

—— 若い力は良いものですね。今後のさらなる成長が楽しみです。

堀 授業の中で教義や祭式などを学び、習得することはもちろん大切ですが、共同生活の中で人を思いやる、相手の立場を考えるなど、まずは人として大切なことを身に

付けてほしいと思います。

それから、今後、大きな壁や困難にぶつかったとき、まずは神さまに向かうということをお忘れしないでほしいですね。神さまにお参りしたら気持ちがあつたとか、巡拝したら心がすっきりしたとか、そういう経験を通し、確かな信仰心を育んでもらえたらと思っています。

時松 若い力で聖地をより一層活気づけ、盛り上げてほしいと思います。彼らが明るく活発に行動すれば、それは全体の元気の源になりますから。重要な未来の担い手として、大いに活躍してほしいです。

—— 彼らに続く若人たちの入苑が待ち遠しいですね。

時松 さまざまな授業をはじめ、インターンシップ制による本部との密な関わりの中で、学苑生だからこそ体験できる研修・作業内容が充実しています。ここでの日々は、まだ見ぬ自分としっかり向き合い、大きく向上できる貴重な時間となるはず。一人でも多くの青年に来ていただけることを願っています。

聞き手／本誌・駒形美和子



ほり 奈砂



ときまつ はるひこ 時松 治彦